

週刊センターニュース No.296



第296号(2010年2月8日) 毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

○●○ 第7回大学教育セミナー開催のご案内 ○●○

学生の能動的学習を促す授業設計とは? アクティブラーニングはゼミ科目ばかりでなく講義型授業においても今後の大学教育の重要なキーワードです。是非ご参加ください。

主催: 大学教育開発・支援センター

共催: 大学コンソーシアム石川 後援: 日本教育工学会

テーマ: 「アクティブラーニングが創る大学教育の未来」

日時: 2010年2月22日(月) 12:30 受付開始 13:00 開始

会場: 金沢大学サテライトプラザ(金沢市西町三番丁16番地 金沢市西町教育研修館)

プログラム

13:10-13:30 趣旨説明 山田政寛(金沢大学 大学教育開発・支援センター 准教授)

13:30-14:30 基調講演 主体的な授業を求めてー私の実践からー

赤堀侃司(白鷗大学 教育学部 教授/東京工業大学名誉教授)

14:45-15:30 講演 知識・技能・態度の全体的育成を目指すアクティブ・ラーニング

ー授業デザイン評価の関連に焦点づけてー

溝上慎一(京都大学高等教育研究開発推進センター 准教授)

15:30-16:15 講演 学習空間とアクティブラーニングー東京大学 KALS の実践をもとにー

西森年寿(東京大学 教養学部附属教養教育開発機構 特任准教授)

16:30-17:20 パネルディスカッション 司会 山田政寛 パネラー: 赤堀侃司、溝上慎一、西森年寿

※参加申込: 件名を「2月22日大学教育セミナー参加希望」として、所属・職名・名前・情報交換会参加可否を明記の上、2月17日(水)までに電子メールにて山田まで(mark@mark-lab.net)。

○●○地域創造学類FD研修会のお知らせ○●○

日時 2月19日(金) 午後3時~6時

場所 人間社会第2講義棟103教室

講演1 15:00~16:00

「愛媛大学におけるFD改革ー教育コーディネーターの導入とその成果ー」

講師 城間 祥子氏(愛媛大学教育企画室助教)

講演2 16:10~17:50

「愛媛大学におけるDP, CP, APの策定について」

講師 久保 研二氏(愛媛大学教育企画室室員)

○●○研究と教育のvisibilityーつながるFDのためにー○●○

1月29日、中央教育審議会は、「大学設置基準及び短期大学設置基準の改正について」と題する諮問を文部科学大臣に行った。「大学は、当該大学及び学部等の教育上の目的に応じ、学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を、教育課程の実施及び厚生補導を通じて培うことができるよう、大学内の組織間の有機的な連携を図り、適切な体制を整えるものとする」との改正提案であり、平成23年4月1日から施行されると予想される。

これにより、いわゆる学士力が、「卒業後自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力」という定義を持ち、各大学は学生がそれを培うことができるように、正規カリキュラムによる教育と「厚生補導」(時代錯誤的な言葉であるが、学生支援のことである)を通じて行うことを、義務づけられる。重要なのは、「組織間の有機的な連携」とそのための体制作りが課せられたことである。教育改善のための組織的な研修・研究であるFDと同様、学生支援推進の実質的制度化が全大学で始まる。

さて、条文で明らかなようにこの間の大学教育の改善政策のキーワードは、「組織(的)」であり「連携」である。このことを、教員の研究者マインドに照らし合わせながら、瞥見してみたい。

私は現在、社会技術研究開発センター (ristex) の、科学技術と人間(領域総括:村上陽一郎(東京理科大学))の研究開発プロジェクト「自閉症にやさしい社会:共生と治療の調和の模索」において、本学の大井学教授(学校教育系)をヘッドにした研究に参加している。このセンターは、「科学技術振興機構(JST)の活動理念を踏まえた上で、社会的・公共的価値の創出を目指し、社会の具体的な問題の解決に寄与するために、幅広い関与者と協働しながら、研究開発および成果の利用・展開を推進」することをミッションとしている。自閉症のプロジェクトでも、学内外の多くの分野の研究者と「関与者」市民とが、例えばサイエンスカフェ形式で討議を繰り返している。

この研究に参加しながら読み始めた書物に、藤井直敬『つながる脳』(NTT出版、2009年)がある。筆者は理化学研究所脳科学総合科学研究センターチームリーダーである。研究内容の評価は、この研究所でやはり脳研究を行っていた経歴を持つ、我が同僚の西山教授に委ねたいが、私は、藤井氏の冷静に自らの研究の行方を見つめる「良心」と「情熱」に文字通り感服した。帯に記載された茂木健一郎の言葉を引用すれば、「とてつもない本が誕生した」ものである。

藤井氏は指摘する。「研究者が独立して生き残っていくのに一番大事なはその人の Visibility、つまり遠くからでも見えるかどうかということであり、研究内容で重要なのはその内容が周辺研究にすぐに応用可能であるかどうかである」。この書では、脳科学からスタートして経済学、法学まで、いわば人間学の広い裾野にまで、鋭い考察を加えており、決して狭い「周辺」などではない。ある先進的な研究が優れたものであれば、いろいろな分野の研究者が見付けてそれに刺激を受けた研究を行い、論文を書く。それが真の impact factor である。

この藤井氏の姿勢は、教育においても求められる。教育改善は faculty で行うものである。学部であり大学であり、学会であり、組織的に develop するものである。授業参観は、他の研究者の論文を読むのと同様、そこに刺激を受け、自分の授業内容方法の originality を自覚し伸ばすために行う。当センター主催のセミナーでもご講演をいただいた、京都大学高等教育研究開発推進センターの田中毎実教授は日本の FD 推進の巨人ともいえる人であるが、京大での数多くの授業参観の体験から、<どの教員もみなそれぞれに授業の工夫をしている、それを相互に学び合うのが FD だ、決してゼロからのスタートなどではない>ことを強調されている。

当センターは学内共同教育研究施設である。毎週の共同学習会、毎週のセンターニュースで、こんな授業改善手段があります、こんな授業改善をしている人がいます、と情報提供をすることによって、教育改善を可視化し、学内(外)の教員同士を結びつけることが仕事の 1 つである。その中から、高等教育の授業内容・方法を対象とした科学的研究へと踏み出している。一般に研究は独立しており共同性も持つ。教育も同じである。ほとんどの授業は教員 1 人で行うが、カリキュラムは 1 つのものであり、学生たちは教員 1 人が育てているわけではない。その意味で、今次の設置基準の改正は、4 年間あるいは 6 年間、それぞれの教育目的の下、キャンパスのあらゆる場面で、あるいは、ポータルを通じてキャンパス外も含んで、学生を育てるためには、教職員の組織的連携が不可欠であるという、当然のことを明らかにするものでしかないと考えられるのである。

(文責 教育支援システム研究部門 青野 透)

○●○ アカンサスポータルに FD・SD カレンダー掲載中 ○●○

アカンサスポータル上に FD カレンダー・SD カレンダーを掲載しています。全国の大学や大学コンソーシアムによるフォーラム、セミナー等の(2010年2月・3月開催分)情報があります。是非、ご活用下さい。